

あとがき

編集委員 乾 淑子

2004年の夏から秋にかけて、日本ではさまざまな自然災害が発生した。夏の暑さは軒並み記録を塗り替え、異常に大量上陸した台風は、地球温暖化による赤道付近の海水温上昇が原因の一つであると言われ、その台風によって食料不足に陥った熊が多数、人里に現れて射殺された。それらはどれも予想され、懸念されたことであったにもかかわらず、その規模や程度は予想された域を超えたものであったように思う。今後もこのような様々な「異常」や「異変」が起り、その度に私達は「これほどのひどさだとは思わなかった」と嘆息するのだろうか。もう、そのように呑気に構えられる状況ではないことは明らかであろう。

具体的に何をするかという時に、なすべきことはそれこそ山のようにあるのだが、やはり、私達はまず、事実をはっきりと受け取らなければならない。例えば、気温を測るのに今だに百葉箱の中の温度をその地域の気温として発表することが「科学的」だというのは時代遅れの中立主義というか、幻想としての客観主義であるようにも思われる。例えば、東京という町の暑さを言うのには丸の内のオフィス街のアスファルトの上、都心の公園の木陰、電車を待つプラットフォームの端、冷房をしていない公団住宅の部屋などのいくつかのサンプルを示しても良いのではないだろうか。通風の良い芝生の地上1メートルなどというのは2004年の都会にとっては非常に特権的な特殊な環境であって、そのような数字は「大して暑くない」と強弁する立場からの利用価値こそ高いものである可能性も否定できない。

非常に近い地点で、例えばアスファルトの上と公園の木陰との気温の違いを日常的に耳にし、目にすることがあれば、浸透性の路面材の導入を後押しする力になるかもしれない。冷房なしで窓の南面に葦簀あしを垂らして打ち水をしている家の温度を毎日知れば、木陰の多い伝統住居と、コンクリート造りで庭を被覆している住居の気温差を知れ

ば、木を大切にするだろうし、路地を露出させることの重要性も分かるだろう。

気温の計測とその提示法一つとっても、実は様々な影響を及ぼしているのである。研究者としては、まず自らの拠って立つ習慣的思考を再検証してみる必要もあるかもしれない。自然科学の工学的応用の結果として環境破壊を繰り返してきた学問の体系の端に連なる者として、その拠って立つ自らの科学的思考への不断の検証は私達の学的な営みに不可欠のものであるはずだ。

その際に必要な態度は、動物である自分の体の感覚への信頼であり、またそのような感覚には個人差もあるということへの想像力でもある。学問が知的な営みであることは疑うべくも無いが、知的な営みを容れる身体へも時々思いを致す必要があるだろう。自分とは頭脳であるというのが近代の常識である。そして身体的な束縛から離れることを良しとして、近代の科学は私達の欲望をかなえる手段を開発してきた。時には自分の肉体を犠牲にしても脳の望みを叶えるのが現代の科学技術である。そのような常識が私達自身の脳を容れる肉体を苦しめ、その生存をすら危うくしているのであるから。

*学会誌の投稿規定が一部改訂されましたが、本号の編集は旧規定によって行われました。

